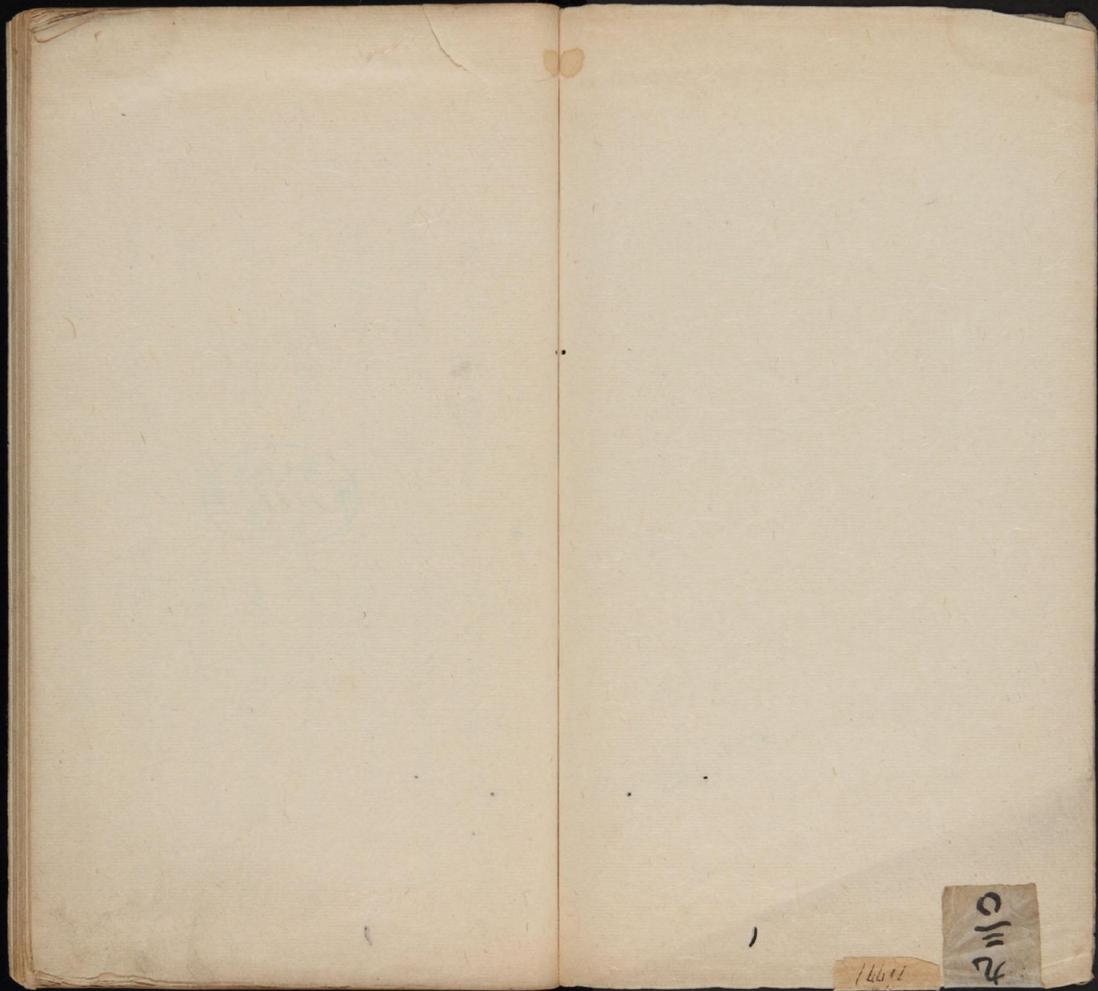


027  
421  
/

よ  
れ  
冬  
の  
記





九三〇

14971







之海の奥をこちち

五口おつちつたよまきをひてひやうこふをけ肉のうへに  
父鬼とつりつりまきしてつりあて着片傍男ハこつりて  
帰ら云燈のうへにうらちはま、難信の井基とて  
事あわねあり中よと南無の初まの法はうそその  
こつへよのつひなうて松皮もてふたうこつ葉よのそよ  
は燈がうけて月入ぬなうらうらあわのあわのわひり  
りて油燈の影のうかひつち

燈を——冬うれまはなほ化へ 其由

中殿燈存竹裏言ここの國れをうせのつちり  
せつちまきうらわのこつちてしつちのうらわをうらわ

とてあふみのうらわをうらわのうらわのうらわのうらわ  
はつちつちのうらわをうらわのうらわのうらわのうらわ  
とてしつちをうらわのうらわをうらわのうらわのうらわ  
かたはつちつちのうらわをうらわのうらわのうらわのうらわ  
寺のうらわつちのうらわのうらわのうらわのうらわのうらわ

寺といふは松尾といふゆゑなりて寺といふは燕尾をわらふに似  
の字に十級あり楠判友と建一塔ありて葺くとほ  
村上らに後ハテといふのいふは松尾の寺ハ一の  
ありこの交由百五十坪ありて寺に木塔ありて  
山寺と楠氏の菩提寺として筑城のころハありて  
寺といふは寺といふは寺の地蔵としてお寺のあり  
とて

寺といふは寺といふは寺の地蔵としてお寺のあり

雨のちういてたてられハ門ありのありてあり

ありてありてありてありてありてありてあり

この間のいれられ乃白くありてありてありてあり

早の城境より入るに礎とありてありてありてあり

小祠のありてありてありてありてありてありてあり

よくんを捕との首塚ハ敵のほりてありてありてあり

ありてありてありてありてありてありてありてあり

ありてありてありてありてありてありてありてあり









月... 花

の... 花

... 花

と... 花

... 花













